

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

令和2年8月 第234号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 超少子の世で『子供が危ない』

今年初めに、昨年一年間の出生児数が86.4万人と報道されました。団塊世代約270万人、団塊ジュニア約210万人と比べると格段に少ない数です。その数少ない子供達を巡って今、悲惨な事件が連日の様に起きています。

全国の小学校や中学校で、子供同士のいじめに遭って自殺する子供達が後を絶たず、いじめと自殺の因果関係を巡る調査や、訴訟が各地で続きます。親の虐待で亡くなる子供も後を絶ちません。最近、千葉県野田市で起きた、小学3年女児を父親が虐待して死なせた事件の裁判の様子が連日報道され、暗澹たる気持ちになります。20代の若い親達が、生まれて間もない子を死なせる事件も頻りに報じられ、母性や父性や社会性が未発達な若者が親になって子育てに戸惑っている様に思え、『子供が危ない』と心が痛みます。

2011年3.11東日本大震災で石巻市の大川小学校では、74人の児童が40分以上も校庭で先生の指示待ちで待機し、全員が津波に飲み込まれました。吐気を催す程の恐怖の中で、傍の山に逃げようと訴える子も自らは行動を起こさずに、全員が指示を待ちました。そして23人の児童の親達が市に対して総額23億円の損害賠償を求めて提訴し、最高裁は14億円強の賠償を認めて結審しました。南海トラフの大地震が近未来に予測される中、此の判決が『自らは行動できない子供』をより多く育てる事につながる様に思え、大きな不安を抱きます。『津波てんでんこ』ではなかったのか? 巨大な自然災害に際して、『怖ければ逃げる本能』を忘れていいのか? 大きな疑問です。

我々の介護現場では今、多くのご利用者が『老いて死に逝く身』を我々介護者に委ねて、穏やかな寝姿のままで迎えた最期に出逢います。その『安らかな死顔』を目にして、ご家族も介護職も心よりの安心感を抱きます。人生の最終場面で迎える最期を委ねられた『介護する身』として、穏やかに看取ることができた事への心よりの安どの気持ちです。

老いて死に逝く身を仲間委ねるのは『人間のみが持つ本能と習性』です。その委ねられた老いの身を介護して看取るのも

(次ページに続く)



(前ページの続き)

『人間のみの本能と習性』です。老いて死に逝く過程に向き合う中で人は、『老いと死の狭間』で苦悩し葛藤しながら、社会を構成して生きる上で最も重要な『思想と人間性・社会性』を引継ぎ、社会生活を営む力を蓄えるのです。

人にとって『如何なる時にも生き抜く本能』は、子供が親から受継ぐ幾多の遺伝子情報の中核です。そして子を産み育てる『種の保存本能』も同じく遺伝子情報の中核であり、人と社会の歴史が続いて来た『根源』です。『逝く身を委ねる本能、逝く身を看取る本能、生き抜く本能、種の保存本能』、これ等の本能と習性がつながり合って成立する『一つの遺伝子情報』を、我々は親から受継いで来た様に思います。しかし今の超少子の世の現状は、「生き抜く本能」や「種の保存本能」が極めて希薄な少年や青年達が急増した結果、と思えます。親から受け継いだはずの遺伝子上の本能が、少年期や青年期までに『退化』してしまったのか？或いは、本能が本能として発揮される為には、遺伝子情報に加えて、何らかの『条件』が必要なのだろうか？

獅子は吾が子を谷に突き落として這い上らせる、といわれます。小さなチャレンジを繰り返しながら獅子の子は、本能として受継いだ勇気と力を養い、蓄え、やがて一人前の獅子に成長するのです。持って生まれた本能を本能として発揮できる様に、親が子を教育するのは人も動物も同じです。そして人間以外の動物は、一人前に成長した子に対しては「一個のライバル」となって競い合います。そして吾身に死期が迫ると、忽然と群を離れ、独り死地に赴きます。

しかし人間は、死期が迫った吾身を子や仲間達に委ねて、集団の中で最期を迎えます。老いて死に逝く身に起こる個別の変化は、委ねる側にとっても、委ねられる側にとっても、『未経験で未知の世界』です。人間は、未知の世界へ踏み込む『勇気と力』を、そして『如何にしても生き抜く本能』を、老いた吾身を介護し看取る営みを通して、蓄えさせている様に思えます。

人間以外の動物は一般的に生殖機能を失った後は、永くは生きていません。しかし人間は、特に女性は50才前後で排卵機能を失った後も、90才前後まで生きる人が大半です。人には生産活動に従事し終えた後にも『社会的に重要な役割』が有るのです。高齢者介護の現場では、高齢女性の『しなやかで、したたかで、たくましい』生命力や生活力が、男性に比べて極めて顕著です。

特に、認知症が安定期に入った女性は、五感が備える感性・感覚と長年の暮らしで培った経験則とを使い分けて、しなやかな社会性を発揮し、やがて穏やかに最期に備えます。その姿は『未知の世界に踏み込む勇気』を後輩達に教え、『子を産み育てる力』を蓄えさせている様にも思えます。

老いて知性も理性も体力も失う中で、生きている喜びを五感で顕しながら、その身を子や後輩達に委ねて『最期を迎える』のが老いの本能です。子や後輩達が介護の中で、逝く人の感性に触れて吾身の感性や感覚を磨き、『死者との関係性』を築いて『受継いだ本能』を社会生活で『発揮する力』を蓄えるのです。

少年や青年達は誰もが、怖ければ逃げ、嫌なら新天地を探し、良き人と出逢って子を産み育てる本能を引継いでいます。しかし最近、若くしてその本能を発揮できない彼らを観て『介護現場の責任』を痛感します。『老いて死に逝く人』と『若い仲間達』とをつなぐ介護現場でありたい、と切に願います。

『老いて死に逝く命の本能』から『若い命の本能』へとつなぐ『バトンタッチ』を、介護現場で実現させたいと、心の底より念じます。

K さんは、平成 27 年 5 月にショートステイ利用を開始され、その後地域密着型特養に入所。令和 2 年 1 月に永眠されました。当施設利用開始の約 5 年前に胃ろうを造設されていました。K さんのことを振り返る前にすこし胃ろうについて書きます。

胃ろうは身体機能の低下などから、口から食事をするのが困難になった人が胃から直接栄養を摂取するための医療措置のことです。当施設でも 10 年ほど前は、ショートステイの利用も胃ろうを造設された方が多く、医務室には注入容器がいくつも並んでいました。それぞれ注入量や種類等も違うので、私達看護師も大変だった事を思い出します。胃ろうされている利用者の中には会話ができ、口から食べたいという意志が強く「この先、口から食べることができなくなっても最期まで胃ろうは使用しない」という意向を本人含め家族に確認できたため、胃ろうを抜いたという事例もありました。他の利用者ですが、家族の同意を得て家族の見守る中でクリスマスケーキの生クリームをごく少量だけ口に入れた時、それまでに見た事のない笑顔を見ることができました。健康な私達でも「今日は食欲がないなあ」と思うことがあったり、食事を減らしたり加減をしますが、胃ろうの注入は指示された量を同じ時間に本人の意思とは関係なく行っていきます。「本当にこのまま注入を続けていいのかなあ」と思いながら勤務していた時、ショートステイ利用を開始されたのが K さんでした。K さんは、手足を自身で動かすことができず、あまり表情もなく 1 日中ベッドで時間がきたら注入するという事の繰り返しで「何を思っているのかなあ」と考えていました。言葉をかけたり、行事があれば参加してもらったり、関り続けていく中であまり表情がなかったようにみえた K さんですが、日を重ねるにつれて「何か今までと違うなあ」と感じるようになっていきました。昔から“眼は口ほどに物を言う”というように眼の輝きが違うのです。体調が良さそうな時は優しそうなまなざしで、しんどそうな時はきつそうなまなざしをします。大きな変化もなく月日は流れていきました。最期が近くなると喉の奥で痰が絡み出し、その都度吸引していました。胃ろうの注入量は主治医と連絡をとりながら少しずつ減らしていきました。そして、最低ラインの注入量でも身体が吸収しなくなることで痰が増え、さらに吸引の回数も増えていきました。吸引するとすごくつらそうな表情をされていました。

K さんの看取りで、後悔していることがあります。家族に状態説明を行う時間をつくり、しっかりと想いを聞くことができなかったことです。今後はこの経験を生かし最期まで本人家族の想いを少しでもかなえられるよう努力していきたいと思います。

#### 【イチジクの木】

一年ほどかけてユニットの裏庭に植えたイチジクの木が大きくなりました。この木は何年か前に『イスラエル産』の木として頂き、さし木したもので、少しですが実もできました。5 月にはその木から 10 株さし木を行い、この夏にユニットの西側の敷地に移植しました。

「そのうちイチジク狩りができたらいいね」とみんなで楽しみにしています。

ユニット型特養主任 別部 克彦





## 妻の看取り

ヘルパーステーション 児島 勉  
(介護福祉士)

妻は2020年1月4日6時26分、天に旅立ちました。61歳でした。

10年前に乳ガン、大腸ガンを患い、その度に手術し健康を取り戻して生活していました。大腸ガンについてはステージⅢBということで、当時居た横浜で医師を探して、数か所の病院を訪ねて行きました。子宮筋腫で子宮を取り出してからの手術ということでなかなか病院を見つけることができませんでした。人づてにいろいろ探していただき、群馬県藤岡市の病院を紹介してもらいやっと手術を受けることができることとなりました。川崎市に住んでいましたから高速道で片道1時間50分ぐらいかかるところです。

ステージは進んでいましたが、主治医の先生の話聞き安心していたと思います。手術は成功して退院しました。入院の間は同じマンションの妻の友人に鍵を預けていて、猫の世話などお願いしていました。友人の方が部屋の換気をして下さった時に「チャメ」という保護猫が脱走してしまいました。退院早々「チャメ」の捜索が始まりました。近所に張り紙などして連絡してもらおうようにしていたら、近所の小学生から連絡をもらって他の人の家に入ろうとしているところを保護しました。小学生の目線の高さや観察の力はすごいと感じました。

その後、私の実家が片親になった関係で妻が「母さんが元気なうちに帰ったらどう？」と言ったことをきっかけに加古川に戻ることにしました。大腸ガンの定期検査のため友人宅に一泊させてもらい群馬県まで通っていました。

術後5年経てば再発のリスクは低いとも聞いていたので二人とも安心していましたが、3回目の検査で「マーカーの値が上昇しているので精密な検査をしてください」と話があり神戸の病院にて検査しました。結果は再発ということでした。検査結果と今後について医師と看護師から説明があったのですが、希望を持って生きている患者への話し方が、患者の思いに寄り添って頑張りましょうという風には思えない、厳しい話し方のように感じました。事実はそのようなものかもしれませんが、また、多くの患者と接している為か極めて事務的に感じました。

近くの明石の病院を紹介してもらい、抗ガン剤治療を開始しました。一年半ほど治療を続けましたが好転せず、抗ガン剤治療による副作用が酷くなり「もう抗ガン剤治療はしたくない」と言い始めました。初めは、「抗ガン剤治療で良くなるのでは」と淡い思いを抱いていましたが副作用による体調悪化、倦怠感を見ていると「抗ガン剤治療を行う意味がないのでは」と思えるようになりました。2週間の間隔で抗ガン剤を投与するのですが、投与した1週間は全く動けないような状態で、やっと回復したら次の投与が来るというようなことでした。彼女らしい生活や生き方を考えたら、抗ガン剤投与を続けることが良くないのではと思うようになり、彼女の意思を優先し抗ガン剤投与を中止にしました。

抗ガン剤投与を中止しても病院との関係は何かしら必要と思っていました。県立加古川医療センターの緩和ケア病棟を紹介していただき、今後の様子を見てもらうようにしました。抗ガン剤治療をしないこと、また、延命治療をしないことを確認されて在宅治療に入りました。放射線治療は行いました。結果、今年の今頃には一時的に体調も良く腫瘍も小さくなり、京都の実家へも行って親族の方々と食事もでき、すごく楽しい時間が過ごせたように思いました。

この好転をチャンスに、もう一回放射線治療を行ったのですが、どういうわけか悪化してしまうようになりました。私が焦って再度治療を勧めたのが悪かったように思って後悔しています。あのままの状態をなぜ長く保ってあげられなかったのか、と思います。悪化して10月23日緩和ケア病棟に入院しましたが、彼女から「良くなる言うたやん」と言われたことが今も心に残っています。

県立加古川医療センターの緩和ケア病棟は、ペットも病室内に連れていくことが可能で、あの脱走した「チャメ」も2回ほど連れて行きました。一週間ほど在宅で看護したりしました。その時は、西村先生にもお世話になりました。職場の方から「後悔のないようにできるだけのことはしてあげてね」と言われたことが最期まで気持ちの中にあり、職場の皆様には迷惑をかけたと思います。最期はできることをすべてやれたとは思いますが、それまではどうだったか考えると充分ではなかったと心に残ります。

ちょっとずれるかもしれませんが、患者さんや利用者さんの気持ちに寄り添い介護するのは大変難しいと思うと同時に、見送って残る家族さんへのサポートも大事な事だと思っています。ベストを尽くした介護であっても後悔はありますし、自身より若い方が亡くなるという不条理に耐えていくのはしんどい。

亡くなってから彼女のことを考えていると、本当に好きだったのは何？食物？買い物？観劇？本当に彼女を理解していたのか甚だ疑問に思うことがあります。彼女の3割くらいしか知らなかったのかなと思います。40年近く一緒に暮らしていた人のことが3割しか分からないので、もっと短い期間の利用者を理解するのは大変なことと考えます。

### 【せいりょう園特養申込待機者アンケート結果について】

令和2年6月24付で、現状についてのアンケートを実施しました。

8月11日現在で、108名中45名の方より返信を頂き、結果は以下の通りとなりました。

- ①特養入所申込を継続されますか。      ・はい 37名      ・いいえ 8名
- ②「はい」とお答え頂いた方々で入所の希望時期について
  - ・今すぐ入所を希望。空きがあれば連絡欲しい 15名
  - ・当面は入所しなくてもいいが、必要な時を待つ 18名
  - ・継続を希望する 10名



アンケートへのご協力ありがとうございました。

今後も現状に変化のあった時、お困りの時は遠慮なくご相談ください。

## 介護について語ろう会

グループホーム 松尾 繁（介護支援専門員）

新型コロナウイルスの影響により、しばらく休んでいた介護について語ろう会が7月17日に行われました。今年度初めての語ろう会は、今回で263回目となります。テーマは「認知症を考える」です。

まず最初に施設長から挨拶があり、2020年度の事業計画書の配布と新型コロナウイルスの近況と介護保険制度についての話がありました。

「新型コロナウイルスのない世界には戻らない、受け容れる必要性がある」といったことや、老いを受け容れて次の世代へバトンを渡す社会作りの大切さについて話されました。



その後、参加者全員で認知症について語り合いました。「認知症とはどんなものだと思いますか？」といった質問に対しては「物忘れが激しくなる」「今までできていたことができなくなる」「日常生活に困ることがある」等といった意見が挙げられました。また、司会者が「認知症とは病気の名前ではなく症状の一種で腰痛や頭痛のようなものでいろんな病気や要因が原因で起こる症状」と言われていたのが印象的でした。また「認知症になったら終わりだと思ったことはないですか？」という質問には「なるようにしかならない。なってみないとわからない」といった意見が挙がりました。いつまでも元気でいたいという願望は誰しも持っています。でも、現実はいずれ皆なることは分かっているが、いざその時になると慌ててしまうという人が大半でした。

また、その後30分近く参加者同士でグループワークを行いました。「認知症の人と実際に会った事がありますか」「認知症についてどう思いますか」「認知症と寝たきりは違うのか」「認知症になりやすい人はどんな人なのか？」などそれぞれが考えを交換し合う時間を持ちました。病気になりたくなくてもなる人がほとんどで、なったとしてもそれによって偏見を持たれて生きる社会はどんどん狭まっていくだけ。認知症の人は突然何もできなくなるわけではなく、少しずつ変化していくため“病”ではなく“自然な変化”として受け容れてみては？認知症はそんなに特別なことではないと、認知症の人と日々関わっている私たちはそう実感していますし、認知症の人の姿を見て安心してほしいと思っています。

最後に「認知症について最初に持っていたイメージと変わりましたか？」といった質問には「認知症について少しずつ分かったような気がする」「迷惑はやっぱり掛けたくないと思う」「認知症はみんな来る道、前を向いて楽しくいきたい」といった意見が挙げられました。

新型コロナウイルスによる影響が懸念される中ではありますが、このようにして地域の方々と語り合う貴重な時間を過ごすことができました。新型コロナウイルスも、老いも、認知症も受け容れられる社会を目指していきたいと思いました。



今年の夏祭りは、新型コロナウイルスの影響により中止となりましたが、デイサービスでは7月29日～8月3日までの期間、お茶の時間に「かき氷」と「たこせんべい」をお出ししました。かき氷は目の前で氷を削り、イチゴ・レモン・メロンから好きなシロップを選んでいただき、たこせんべいは職員がソースで名前を書きました。「うわー！懐かしい！」

「かき氷食べたことないねん。初めて食べたけどおいしかった～！」「見て！ソースで名前まで書いてあるで～！」「名前まで書いてくれてうれしい！」と、とても喜ばれていました。かき氷とたこせんべいだと、量が多くて食べきれないのでは？と思いましたが、皆さん見事に完食され「また来年が楽しみやな～」とすでに来年が待ち遠しい様子でした。      デイサービス副主任 ベハラノ 恵

～20年が経ち～



特養生活相談員 福田 真希  
(介護福祉士)

入職してから、早くも20年が経ちました。

介護の事は何も分からず、学校で勉強することが嫌で働くことを選んだものの、施設長が言われる言葉はちんぷんかんぷん、先輩についていくのが必死でした。

入職の時には5日間、観察という研修があり、ご利用者の生活状況を1日通して傍で過ごし観察します。観察だけでは5日間は長いように思いますが、今となってその期間が貴重で大切な時間だったことや、観察の重要性を実感しています。

今は特養で生活相談員として勤務しています。相談員の仕事の1つとして歴代入所された方の台帳管理があります。6月に入り、ちょうど500人目のご利用者を迎えました。せいろ園の仏壇には亡くなられた方のお部屋にかけてあった表札を並べ祀ってあります。お一人お一人物語があり、お名前を見ると懐かしく思い出がよみがえります。

私事ですが、私生活でも結婚、出産、子育てと変化があり、毎日仕事と育児、家事・・・「あー、また朝がやってきたー」の繰り返しです。仕事もですが、子育てでも勉強が嫌でとは言ってられないので、日々勉強です。そんな日々のなかでも、子供の成長を感じ変化を観察するのが子育ての唯一の楽しみで癒しとなっています。仕事では、一生懸命生きておられるお年寄りの姿を見ることが癒しとなっています。

ベッドで休まれているご利用者へ、行事への参加を勧め、「何かしたい事はありますか？」と聞いたことがあります。天井を見つめ「いま、いそがしい」と言われました。

入所される時には、生活歴を伺って介護する上で参考にさせてもらっていますが、70年、80年、90年と歳を重ねて来られた生活は私には未知の世界で想像を絶するものだと思います。利用者がうたた寝されている姿もよく見かけます。気持ちよさそうに見え、安心して過ごしてもらえているんだなと思える時もあります。

育児・介護＝何か手伝わないといけないと思っていましたが、一方的なおせっかいなのだと思うようになりました。身体が不自由になったり、思うように動けなかったり、言葉が話せなくなっても最後の最期までどんなことが起こるか分からない。自身の身体と向き合いながら他者へ身を委ねて、日々を乗り越えている姿が身近で感じられ「生きる」難しさ「生命を全うする」ってすごいことだと学ばせてもらっています。

最期、亡くなられたとき、うたた寝しているかのように眠っているようなお顔を見ると、人生の最後の時に関わらせていただけたことがありがたく、この仕事に誇りを持ちます。これまで関わらせていただけた方々のご縁に感謝し、これから出会える方へも安心して過ごしていただけるように日々勉強です。



## 木野雅之ヴァイオリン・リサイタルを終えて



今年で第27回を迎えた木野雅之氏のヴァイオリン・リサイタルですが、新型コロナウイルス感染症対策の為、例年とは開演時間や来場者数を大きく変更し、新しいスタイルでの開催となりました。法人

内事業所6ヶ所に中継を行い、入所（居）者の皆様にもスクリーンやテレビで鑑賞していただくことができました。来場者の皆様にはマスク着用や検温・手指消毒にご協力いただき、開演途中での換気など感染対策を万全に行い開催できたことに感謝いたします。

木野氏も新型コロナの影響で2月以来のリサイタルとのことでした。今年は様々な行事が中止になり何もできない自粛疲れ



の中、世界一流のヴァイオリニストが奏でる素晴らしい音楽で癒の時間を過ごして頂けたのではないのでしょうか。新型コロナの終息を願い、また来年もお会いできることを楽しみにしています。

今後、この感染予防対策の一環で行った中継システムを使って、仏教講話なども入所（居）者の皆様にお届けいたします。また、7月に入り新型コロナの新規感染者が全国で増加し、せいのりょう園においても対面による面会を中止しておりますが、オンライン面会にむけて準備しています。全ての行事が中止となりご家族との面会も出来なくなった高齢者施設では、感染予防対策のために追われる日々ではありますが、少しでも入所（居）者の皆様の生活が彩ある豊かなものなるように、感染対策を行いながらできる事をお届けしたいと考えています。

### 【行事のご案内】

- ① 仏教講話 9月7日（月）15：00～16：00〈教信寺 長谷川 慶悟住職〉
- ② 介護について語ろう会 9月25日（金）14：00～16：00  
〈認知症について考える：グループホームまどかでの暮らしを事例に考える〉

### 【せいのりょう園空き情報 8月17日現在】

- ・グループホーム：1室 ・グループホームまどか：1室
  - ・サービス付き高齢者向け住宅
    - ① リバティかこがわ：6室
    - ② 自愛の家さくら：3室
  - ・グループハウス岸本邸（シェアハウス）：1室
  - ・ケアハウス：空きなし
- [問合せ先] せいのりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

